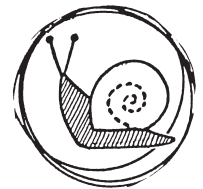


浄相院
だより寿
光

第57号

平成24年6月1日

発行：浄相院
畑中芳隆〒332-0035
川口市西青木1-10-34
TEL 048 (251) 5984
FAX 048 (251) 5792

悩む

住職 清譽 芳隆

五月の連休明けの毎日新聞の『女の気持ち』にこんな記事が載っていました。投稿者は四十歳の女性です。「乗り越えよう」という題です。

新学期早々、中学に入ったばかりの娘が不登校になった。理由は分かっているが、彼女の不安を取り除くすべが分からず、毎日つらい。朝起きると、急に気が変わって「学校に行く」と新品の制服を着て部屋から出てくるのではないかと想像し、キッチンで涙してしまふ。入学してまだ数回しか、制服姿を見せられていない。

夫婦とも仕事をしているため、娘は昼間一人で家にいる。職場で机に向かっていると、留守番している娘を思い浮かべ、また涙があふれてしまふ。学校で配られたテストや宿題のプリントが担任の先生から届くと、娘は目

をキラツとさせて、すぐに取り組む。勉強への興味はあるのだ。ただ、学校に行くことができない。

どうしてこうなってしまったのだろう。友達と一緒に、不安もあったけど期待を抱いて入学したのに、数日しか登校できなかった。小さなつらいことが何度も重なって、ついに学校に行けなくなってしまったのだ。娘のくやしき、つらさ、悲しさを思うと涙があふれてしまふ。

でも母さんは負けない。いつかまた笑顔と自信を取り戻せるように、できる限りのことをするよ。このつらい時期と一緒に乗り越えよう。5年後、10年後にはきっと「ああ、そんなことあったね」って笑える日が来る。そう信じています。

母子の悩み・苦しみのつらさが痛いほど伝わる文章です。何とかしたいけれど何もしてあげられない、そんな母の想いが一層読み手に迫ってくるようです。悩みが高じて突き詰まってしまうと自分の存在すら疎ましくなっ

てくる時があるかもしれません。

しかしつらさのなかに一条ではあるけれども確かな光を見出すことができます。それは娘の苦しみを自分の苦しみとして共に悩み、涙している母の姿です。ご当人はつらさの極地におられるのですがその何にも代えがたい慈しみのお心が私たち読み手をも涙させるのです。

子を思う親の姿は仏さまと私たちの関係と同じなのです。親縁（しんねん）といっているで親が子を心配するかの如くに私たちと仏さまは親しいものであります。

どうしてもつらいときナムアミダブツと声に出してみてください。きっとあたたかいものに触れられるはずです。幼いときに母を呼んだときのように。

阿弥陀さまの私たちを必ず救うというお誓いを信じてナムアミダブツが口をつくとき、そこには、「乗り越えさせていただいた」世界があるように私は考えます。

お盆の季節も近づいてきました。生かされている感謝のうちに亡き方を、ご先祖さまをお迎えをする準備をして参りましょう。

